



統

法財人團

統一團發行

次 目

信心の心得(中の下)……………	本多日生
開目鈔講話(承前)……………	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十三)……………	河合陟明
祖先追孝の眞義……………	本聖院
記事	
○本部團報	
○福島教信	
○産報會記	
○入帳報告	

號月七 年七十四第

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超ニ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ提出セラル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

信心の心得 (中の下)

本多日生

三、信心の内容

次は信心の内容であるが、吾々の信心の内容は無論法華經の教に基いて定まつたものである、自分の考へて定めて行くのではなくして、お釋迦様から教へられた教の内面に信心といふ事がある、斯ういふ事が大切であるぞ、と言はれたならば『なる程これは大切な事だナ』と考へて、その教に心を委せる所に信仰はあるのである。例へば人間の方ではうつかりして居るのである、今の法華信者の中には本當の人生觀の上から來ないで、唯だ物慾生活の上から法華を信じて居る者がある。自分の職業に就ては經濟上の原則といふやうな事には少しも考へを及ぼさないで、唯だ信心をして商賣繁昌を祈るとか、衛生なり健康なりといふ事を考へずして、平常は不養生をして居りながら、病氣になつた時には一生懸命に神頼みをするといふやうなことは、これは法華經の教には合致して居ない。平常は少しも確乎たる

信心を打ち立てずして、商賣が左前になつたら俄に信心を始めるナンといふことは宗教の信心ではない。どうしても神佛の實在を信ずるとか、自分が人生觀の上に覺醒^{さうせん}めて一つの大きな觀念の上から祈るといふことに於て、始めて宗教の信心である。さういふ心得がなくて唯だ神社佛閣へ參詣をして御利益を得ようといふのは一種の迷信といふのである。そんな事は法華經の教にはない。

法華經はその入口の所から説かれて居る事は、ナニもそんなに難^じかしい事ではない、天地萬物一切の物は、決して原因なくして生じて居る物はないのである、さうして茲に在りし物は飽くまで在るのである、在る物は決して無くならないのであるから、今日の存在は永遠のものであるといふ事を考へる、無い物が出て来ない、在る者は無くならない。して見れば茲に在る物はすべてその中に魂を有つて居るのである、その魂を有つて居る物の中でも、特に吾々人間と、モウ一つは悟つてござる佛様、この吾々より尊い佛様と吾々との關係に就て教へて行く爲に、法華經は説かれて來たのである。であるから最初に諸法實相を説いて宇宙一切萬有の實在を明かにし、それに續いて一切衆生の佛知見を開くといつて、人々はみな佛の性質を具へて居る事を説き、さうして佛はこの一切衆生の上に無限の慈悲を垂れて居るといふ事を説かれて居る、その衆生と佛との關係をだん／＼詳しく説いて行つて、その説明の完結を告げたのが壽量品といふことになつて居る。そこで法華經といふものは難かしいものではない、人々の佛性の意味合ひと、佛の實在の意味合ひとをあらゆる方面から證明されて居る、それが宇宙の實相である。日本の國體に於て言へば、皇室と國民の關係の如く、皇室に於ては親愛の心を以て國民に臨み、國民は忠誠の心を以てこれに奉じて行く、その君民心を一にするといふ所が國體の精華である。宇宙の實相は佛の實在と衆生の佛性の開發とが相結んで、着々と衆生が教はれて行くのが實際の有様である、その點が法華經によく説かれて居るのである。

それは自分の事に就て考へて見るのが一番よい、さうするとお互ひ人間は魂がある以上はこの魂といふものは始めがある譯ではない。茲に有る存在は本來^{もと}から有りし物の存在であるから、どんなに古い昔に行つてもやはり始めから自分の魂があつたといふ事を認めなければならぬ。さうして茲に在る以上は決して無くならないのであるから、この生命は永遠に存在して行くのである、始なく終なく存在して居る自己である、さう考へて見ると非常に有難いものである。併ながらその生命の内容を成して居るものには善い方面と悪い方面とあるし、佛様に成れる要素も地獄に墮ちる要素もある、その地獄に行かうとする方面を注意して、佛様に成る方へと進んで行かなければならぬといふ事が茲に考へられて、そこに宗教的の出發點がある譯である。それが何にも無いならば宗教を信する必要はない。病氣の事ならば、衛生學なり醫學なりその方で養生をしたら宜からう。商賣ならばその方に勉強して儉約して行つたら宜からう、自分の職業に精を出さないで毎日々々お寺詣りばかりして居つても商賣は繁昌しないといふ事になる。だから商賣は商賣の方で、衛生は衛生の方でやつたら宜いだけ

れども、その上にどうしても人生の根本義を教へて貰はなければならぬといふのは、人間に魂といふものがあるからである。さうしてその魂のことが本當に判つて見れば、そこに一時の肉體の病氣などは大した問題でなくなる。若いとか年寄とかいふのは肉體の上のことであつて、魂の本体に於ては年寄も若い者もない、肉體が死んで無くなるといふのも、それは借家が毀れて主人が一時出て行くのであつて、その魂は永遠に残る魂である。さうして生きて居る間に人間がいろ／＼な働きをするのであるが、つまらない事を考へて下らぬ心配ばかり多くなるやうになつて行くのも、善い事を考へてだん／＼向上して行くのも、それは魂の働きである、その魂の働き方といふことが宗教に於ても一番大切な事である。そこで佛性が覺醒めたらば、如何なる人間でも非常な喜びの心に活きて人生の幸福を味ひ、又菩薩行にも進んで善根を積み、さうして竟には佛様にまで進んで行くことが出来るのである。

それには自分の生命の内在する佛性といふ尊い價値を悟ると同時に、これを導いて下さる佛様の有難さを感じ、どうぞして衆生を助けてやらうと考へて下さる佛様を信じて、その救ひに繋がつて行かなければならぬ。その繋がりの言葉として南無妙法蓮華經といふことを口に唱へて行くので、佛様から言へば南無妙法蓮華經は汝を救ふ力である、佛の無限の智慧、無限の慈悲、一切の救済の力は南無妙法蓮華經の言葉の中に籠つて居る、吾々の方から言へば、吾々が南無妙法蓮華經を唱へて、吾等の

信念、吾等の渴仰を悉くこの中に籠めて捧げる時、釋尊と吾々の力が結合してそこに救はれることになる、双方の力が相結んでそこに活躍を始めるのが南無妙法蓮華經の聲である。

さういふやうに信心の内容を心得てお題目を唱へると、そのお題目は非常に意義がある、佛様の有難さも活躍するし、吾々の發奮興起する力も活躍するし、非常な意義ある意味合ひがそこに現はれて來るのである。それは多くの場合頼むといふ祈願の念よりも、有難いといふ感謝の念が主になるのである。それはどうしてもサウなるので、佛様の方で一切衆生を救つてやらうといふ思召はちやんと定まつて居るし、吾等衆生も救つて貰はうといふ心は定まつて居るのである。だから息子が『どうぞ私の爲に心配して下さい』と言つて親父の所に頼みに行かなくても、『いつも父母の御恩に對しては感謝の念を持つて居ります』と言へば宜い譯である。それを『私はあなたの息子です、いくら商賣が忙しいからといつて、少しは面倒を見て下さい』ナンと言つて大きな聲でねち込まなくても宜い、親はどうぞして子供を救つてやらうといふ心は始終持つて居るのであるから、子供の方からねち込むなどといふことはどうしても下等な意味になる。よく裏長屋などに行くときそんな事を言つて居る者があるけれども、それは低級な人間のこと、普通の親子の關係であるならナニも『可愛がつて呉れ』と言つてねち込むことは要らない、『有難うございます』といふ感謝の一念が一層親子の情を深くせしめて行くのである。その意味に南無妙法蓮華經を考へて行くと宜しい、頼む事が決して悪い事ではないが

頼むといふ考より、有難く思ふ考を以て唱へて行くのが宜しいのである。

四、信心の得益

そこで今度は信心の結果として得益といふものが現はれて来るのであるが、これは決して普通の人の言ふやうに小さく考へてはならない、病氣の時の神頼みのやうな意味に考へてはならない。人生にはいろ／＼の苦しみが絶えないものである、これを佛教では四苦八苦と言つて居るが、第一に生老病死と言つて、これは人間として免れることの出来ない苦しみである、病氣になることは嫌なことであるけれども、病氣に罹らないまでも年を老つて九十歳のお爺さん、百歳のお婆さんといふことになつてしまへば、モウ齒は抜けてしまふし、耳は遠くなるし、ボーツとしてしまつて餘り有難い譯ではないのである、さうして結局人間は老衰して死んで行くのである。自分が死なぬでも親しい者が死んで行けば自分の死ぬよりも辛いのである、愛別離苦といつて自分の愛した者と別れて行く苦しみも免れ難いことである。殊に女の人は、自分の子供などが死んだならば本當に辛い事である。この間も或る婦人から聞いたことであるが、妙齡とらの孫娘が一人あつて非常に可愛がつて居た、良縁があつてモウすつかり嫁入道具を調へて居つた所が、その娘が病氣になつて、醫者はモウ助からないと云ふ、一旦拵へた着物も何もかも無駄になつてしまふ、それは仕方がないけれどもせめて娘の息のある内にモウ一

度婿になる人の顔を見せてやりたいといふので、その婦人は幾度も婿の方と話し合つて、婿の方では死んで行く女房に顔を見せるのは嫌だと言ふのを、漸くにして頼んで連れて来て枕頭まくらに坐らしたといふことであるが、實に可哀さうなことである。私もその娘を知つて居るが、非常に容貌かたちのよい娘であつた、それが病の床から婿の顔をチョツと見たゞけで死んで行くといふことになる、そんな場合にでもなつたら、佛教の信仰といふものを持つて居ないと、人生の苦痛といふものは限りないので到底堪へられるものではない。その他求めて得ざるの苦といつて、いろ／＼の事業のこと、名譽のこと、一切のものを求めても思ふやうに得られない爲に苦しむ、それ等の苦の全部を佛教は救はんとするものである、決して商賣の事はかりではない。

それが信心の結果はどういふ具合に現はれて来るかといふと、無論信心をして行けばそれだけ人格の上に光が現はれるからして、何の上にも善くなつて行く、それは非常に強いものである。宗教が人を造りかへる力といふものは非常にえらいものであつて、のらくら者を働くやうにし、愚かな者を賢くするといふ點に於ては、随分昔から宗教の力に依つて人間を造りかへた例は澤山ある。自分が知つて居る人間でも、岡山縣の津山の町にあつた事で、私の學問の師匠に關する話であるが、その師匠の寺の近所に小さな床屋があつた、奥行一間ばかりの、人の軒下のやうな所でやつて居つたが、そこに師匠がよく頭を剃りに行つてはいろ／＼の話を聞いて居つた。その親方といふのが法華の信者で

信心の眞似事ぐらゐをやつて居るので、信者らしい自慢をしながら『和尚さんは何處だい』といふやうな話で、私の師匠は偉い人ですが小さな寺に入つて居たから『ナーニ小さな寺ですよ』と言つて笑つて居つた。所が親方は法華の片言みたいなことを言ひながら頻りに自慢をするので、チクリ／＼と間違つて居る所をつつ突いてやつたものだから『ヤア、あなたは偉い坊さんだネ』といふことになつて、だん／＼話を聞いて居る内にすつかり感心してしまつた。それで熱心に法華經のことを勉強し始めた、字を知らないので手紙も葉書も書けない者であつたが、遂に感激して、字を知らなくてはならないでも偉くはなれない、口先だけでは大成が出来ないと悟つて、『それぢやア字を習ひます』といふので、三十を越してから手習を始めて、初めは『いろは』からやり出したものでせうが、だん／＼御遺文に薄紙を敷いて寫して書いては師匠に教へて貰つて覺えて行つた。さうして師匠に就いてだんだん勉強して行くうちに、終ひには偉い者になつてしまつた。さうして明治十六年に日蓮聖人の六百遠忌があつて、全國から京都の本山に信者と共に詣つたのですが、偉い坊さん達も澤山集つた、その頃でも吾々の宗旨は開けて居つたので、在家の人を選んで説教をしようではないかといふ議が起つて、人選の結果選ばれて出たのが、以前は人の髪を剃つて居たその後藤といふ男で、立派な羽織袴を着て登壇した、初めは字も知らないやうな男であつたが、教學上に良い頭腦を持つて居つたものか、遂に感奮して立派な説教をやつてのけた事がある。師匠も始終『後藤ぐらゐ偉い奴はない』と言つて居つ

た、何も知らない無學文盲の者でも、信念から行けばさういふ事になるのである。

又これは少し神祕的の話になるけれども、千葉の田中の法光寺といふお寺の屋根替に來て居つた屋根が非常な熱心な信仰を持つて居つた、やはり字が讀めないのだけれども、一字々々字を習つて行つては年を老つてしまつて仕様がな、一遍にすつかり判るやうになりたといふ願をかけて一生懸命にやつて居つた。所が遂に明るい所では字は讀めぬが、暗い所では讀めるやうになつた、不思議なやうであるが神通作用のやうなものを受けて、無學の屋根屋が遂に一遍に字が讀めるやうになつたといふ事を言ひ傳へて居る。どの程度まで眞實であるかは分らないけれども、その暗い所で字が讀めるといふのは或る程度まで事實であつたかも知れない、やはりこれも信心して發奮した結果であらう。釋尊の御弟子の中には本當に眼が見えなくて字が讀めたといふ人が居つた、それは阿那律尊者といふ人で、元から眼が悪かつた故か、睡い／＼と言つて仕様がな、それは寢坊なのだからゆつくり寢させた方が宜いといふのでウンと寢させたが、やはり睡たい／＼といふのは止まない、隨つて十分修行が出来ないので、釋尊もさういふ事ではいけないといふので呼びつけて叱言を言はれた、併しやはり生理的關係であつたか知らんが睡たい／＼と言つて仕様がな、遂には眼が悪かつた結果で盲目になつてしまつた。それでも尊者は一生懸命に信心したので、遂に天眼第一と言つてあらゆる物が見えるやうになつた、この阿那律尊者は確かに眼は潰れたが見えるやうになつたのである。宗教は本當

に信する者には偉大なる力を現はすものであるから、眼が潰れても物が見えるといふやうな事は偉いことであるが、朝寝坊の奥さんが早く起きられるといふ位のこととは直ぐ出来る。詰らない事で腹を立て、仕方がないやうな亭主が、腹を立てないやうになる位のこととは確かにあるのである。

その人格の改造といふ事が信心に於ての一番の御利益である。随つて人格が直つて来ると、しつかりした觀念が出来て来るから、苦しい事に出會つてもそれを苦しいと思はなくなつて来る、心に確かりした落着が出来て来るから、どのやうな事件が湧いて来ても適當に處置して行くことが出来る。人間がひどく苦しむといふのは多くは智慧の足らぬことから起る、その事に適當の設備をして行けば、どんな事件が出来ても困るものではない。出来てしまつた事に對しては、一應は元に戻さうと骨を折つても見るが、その以上はその事に對して適當に處理して行くより仕様のないものである。寧ろ徒に苦しむ悲んでも益する所なしといふことに依つて、チャンと適當の處置が取れることである。それが宗教の信心をして居ればチャンと如何なる事でも捌きがついて、決して堪へられないやうな苦しみやまごつきに陥るやうなことはない、人生に處して謬らざる處置が出来、それが御利益である。信心して居るから如何なる事に出會つてもまごつかない、苦痛に陥らない、人生にうまく棹さして行くことが出来るのであるから、人格を改造し幸福を増進することが信仰の御利益として出来るのである。

(次 續)

開 目 鈔 講 話 (承前)

小 林 一 郎

文殊師利、若善男子あつて正法を護せんと思はば、彼の貧女の恒河に在て、子を愛念するが爲に、身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦是の如くなるべし。寧ろ身命を捨てよ。是の如きの人、解脱を求めずとも、解脱自ら至ること、彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如し等云云。

お釋迦様が今の貧しい婦人の例を説かれた後に「善男子」お前達もこのつもりで居ろ。本當に正しい教を護つて世の中に傳へようと思へば、この若い貧しい婦人が自分の子供と一緒に水の中で溺れて死んでも後悔しないといふくらゐな、この心持を持つて行かなければならぬ。

寧ろ自分の命を捨てても子供を手放さなまいといふ、この思ひ詰めた婦人の如くに、自分にどんな災難が来ても、どんな艱難に遭つても、この信仰は捨てないといふこの心持をしつかり持たなければいけないぞ、斯ういふ事を言はれたのであります。さうしてその婦人は後の世には天上界に生れようとは望まなかつたけれども、自分の子供を愛する慈悲心の報いとして天上界に生れた。信心をする者もその通りで、自分は無理に佛に成らうと望まなくとも、その信心を貫く爲に命を捨ててもやるならば、その結果自分の智慧も明かになり、自分の慈悲心も明かになり、その人自身が優れた者になるから、後に至つては佛の境界にも到達するといふ、一切衆生を救ふやうな大きな力を具へるやうにもなるだらう。斯ういふことを涅槃經の中にお釋迦様が言つて居らつしやるのであります。この心持を以て日蓮上人は法華經の爲に命を捧げる決

心をしたと言はれる。自分一人としては一切の罪を償ふだけだけれども、法華經の行者としてどうする、命に懸けて法華經を弘めるといふこの決心をすることに依つて自分の本来具へて居るところの佛に近い佛性、佛に相通する性質が大きくなつて行く。智慧も明かになり、慈悲心も大きくなるに相違ないから、この世の五十年六十年の努力が、後の後に於て自分はモツと善い事があつて、モツと佛の教を世に弘める役に立つのだと思つたら、この世の五十年や六十年の苦しみは物の數ではないと思ひ定めたと言つて居られるのでありまして、これは宗教の信仰としては非常に大事なことであります。

序ですから申上げますが「不惜身命」身や命を惜しまぬといふことは、身や命が惜しくない以上は、その他のものは惜くないといふことです。その他のもの、これを考へなければいけない。身が惜しくない、命も惜しくない、況して地位も欲しくない、勢力も欲しくない、斯ういふことであります。これは日蓮上人が佐渡で開目鈔をお書きになつてから間もなくお書きになつたお手紙の中に、今日「佐渡御書」と言つて遺つて居りますものの中に、能くその説明をして居らつしやる。命さへ捨てられるといふ人ならば、他のものは皆捨てられるのだ。それから命を捨てろといふことを佛様は仰しやる、斯うい

て居ることです。

此經文は章安大師、三障をもつて釋し給へり。其れを見るべし、貧人とは法財のなき也。女人とは一分の慈ある者也。客舎とは穢土也。一子とは法華經の信心了因の子也。舍主驅逐とは、流罪せらる。其産未久とは未だ信じて久しからず。惡風とは流罪の教宣也。蚊虻等とは有諸無智人惡口罵詈等也。母子共沒とは、終に法華經の信心をやぶらずして頭を刎らるゝ也。梵天とは佛界に生るゝをいふ也。

そこでこの經文を引きまして、支那の章安大師所謂天台大師のお弟子でありますが、この方は三つの障を以て解釋された。三つの障といふのは、命の迫害、或は地位の迫害、或は富とか位とかさういふものを皆まはり中からいろ／＼迫害される。その場合に少しも苦しいことはないといふことを十分に説いて居られる。

そこで此の經文を考へて見ると、貧しい人といふこと

ふのであります。命さへ要らないといふなら、金も地位も勢力も何もそんなに欲しくない譯でせう。それで終命を捨てろといふことを言つて居られるのであります。

ところが、甚だ亂暴な事を言ふやうだが、今の世の中になつて見るとそれが逆になつて、命は惜しくないと言ふ人が金が欲しかつたり、勢力が欲しかつたり、地位が欲しかつたりする。おかしいことであります。何故かといふと、命は惜しくないと言つても誰も殺しに来る人はいないから、平氣な顔をして命は惜しくないと言ふ。ナニ大丈夫だと多寡を括つて命など惜しくないと言つて居る。金が欲しくないなどと言ふと、毎日寄附金を取りに来られては困るから、さうは言はない。地位が欲しくないと言つて免職されては困るからさうは言はない。命の方だけは大丈夫、命が惜しくないと言つても誰も殺しに来る人はいない。しかし命が惜しくないと言ひながら金を慾張つたり、地位を欲しがつたり、勢力を欲しがつたりして居るのは、人を欺き自分を欺くことであります。命さへ惜しくないのなら、況して他のものを惜しむ譯はない。信仰の爲には何を捨てても惜しくないといふ決心が不惜身命といふことになつて現れて居るのであります。その事は餘程しつかりと考へなければならぬのであります。これは開目鈔の中に今までもにも繰返し／＼言はれ

を言つて、今の子供を産んだ婦人は貧乏人だと斯う淫婬經の中にあるのだが、それは譬であつて「法財のなき也」これは智慧が足りないといふことであります。ママ吾々が法華經を讀んでも初めは解らぬ。法華經を讀んでも初めから法華經の中味にどれ程深い意味があるか解らない。ちやうど金がないと同じことであります。法財のなき也、その智慧の足りない者が、どうして法華經の奥深いやうなことが解るやうになるかといふと、それは信に依つて解を生むのです。一生懸命にこれを有難いことだと信じて眞面目に考へて居ると解つて来る。「何だか解らぬけれども、どうも何だか深さうなものだらうかな」とボンヤリして居てはいけません。これは佛様が魂を籠めてお説きになつた事だから、尊いに相違ないと深く信じて、魂を打込んで考へて居りますと、信に依つて解といふ、即ち理解力を得ることになつて行くのであります。これは普通の哲學や科學などは違ひまして、宗教のことは信するといふ力がなければ本當に解るものではない。だから初めは解らぬでも宜い、佛が本當に眞實の教だと仰しやつたのだから、その眞實の教を有難いと思ふといふ心持がありさへすれば、その有難いと思ふ心持に依つて自ら解つて来る。佛様のお心持が自然に解つて来る。斯ういふことであります。ちやうど貧乏な婦人と

いふのはさういふことを譬へたのです。信心するのに初めからスツカリ解る譯はないのだけれども、それでも宜しいのだ。

それから女人、貧乏な女といふのは、これは「一分の慈ある者也」人を愛するといふ心持があるといふことである。獨逸の諺に「愛は總ての道を示す」といふことがあります。子供が可愛いと思ふ。可愛いと思ふだけで子供の事がスツカリ解つて來るといふのです。孔子は「未だ子を養ふことを學んで而して後に嫁する者は有らず」と言つて居ります。嫁入る前に、子供が生れたらその生れた子供をどうやつて育てようナンて、そんな事をスツカリ研究して嫁入る人はありません。それは學校で教はつた。衛生、生理、育児法ぐらゐは上の空で覺えて居る。けれども實際子供を産んで、その子供が可愛いと思つて、その可愛いといふ心持から、その子供をどうやつて育てよう、どうして世話しよう、事前の研究して嫁入る者はない。嫁入りして子供が生れてから、可愛いと思つてその子供を世話すれば、その時になつて本當に解る。子供を育てる研究をしてから嫁入る者はない、誠心から子供を愛するといふ心持があれば、子供が生れたらどうして育てるかといふことは、その時になつて能く考へれば解る。斯ういふ事を孔子も言はれて居る。今の獨逸の「愛は總ての道を示す」といふのと同じことであります。本當に人間が慈悲の心持があつたならば、その慈悲の心持を本にして、その自分の愛する者をどういふ風に救つたら宜からうか、どういふ風に世話したら宜からうかといふことに就いて能く考へて見ると解るのであります。だから慈心、情けの心持といふものが物を知る土臺になる。斯ういふ説明になつて居ります。如何にもその通りでありまして、病人の看護などでも、衛生、生理の一通りを心得て居つても、ナニこんな病人はいつ死んでも宜いやと思つて居る人より、衛生、生理も何も知らないでも、どうか病氣を癒してやらうと思ふ人の方が手が届く。その愛するといふ心持があると有ゆる工夫がそこから生み出されるものです。それをこゝに言つて居ります。女人といふのは一分の慈あるものである。

い目に通つたといふのは、この世に於ける一生涯の短い間に譬へたのだ。それから一人の子供といふのは「信心」に譬へた。子供を産んだらその子供を大事にするといふのは、法華經を信するといふその信心を本當に自分の子供と思はなければならぬ。その信心は而も「了因」の子である。了因といふのはこれは前にも申上げたかと思ひますが、人間が佛に成る性質を有つて居る。所謂佛性を具へて居ると申しまして、その佛性は三つに分けて説明をされるのでありまして、

正、了、緣
因、佛、性
佛、性、性、性

これを合せて「三因佛性」と申します。正因佛性といふのは、人間が皆佛に成る本性を有つて生れて居るといふこと。これは佛敎を習つて居らないでも、苟くも人間であれば、人に恵みを施すとか、人を可愛がるといふやうな本性はある。それが正因佛性です。それから「了因佛性」の「了」といふのは修行して行くことで、修行して行くとき佛性がだん／＼伸びて大きくなる。それが了因佛性です。誰だつて親が子を愛するとか、夫婦仲好くするとか、兄弟睦しくするぐらゐのことは知つて居るけれども、それは信心もし、敎育を受けなければ伸びない。自

分の家の子供を可愛がるといふことは知つて居るけれども、隣家の子供は憎がつて見たり、夫婦仲好くすることだけは知つて居るが、近所の人には義理を缺いてもかまはないといふことになる。ところが了といつて、修行することが本になつてだん／＼佛の敎を學んで行くと、その佛性が大きくなる、自分の親子、兄弟だけ仲好くするだけではない、一切の人に恵みを施し、一切の人に敎を與へるのが愉快だ、斯うなつて行きます。これが了因佛性であります。即ち佛の敎を學ぶことに依つて、その佛と相通するところの性質が大きくなつて行く。それが了因佛性であります。

ところが信心をするとか敎を學ぶといふことは、緣といふ實行の爲に學ぶのだから、そこで「緣因佛性」で「緣」は實行のことです。了といふのは敎のこと、緣といふのは實行のことです。了といふのは敎のこと、緣といふのは實行のことです。實行しなければいけない。たゞ日蓮上人の開目鈔にどうあるとか。イヤ法華經の勸持品にどうあるとか、たゞ覺えて居ても仕様がな

い。了、習つた事は緣に依つて實行して、日々行ひ、人と交際したり、自分の仕事をする場合にこれを實際に現はして行くといふことで、初めてア、斯ういふものかナ。人に恵みをかけることがどんなに有難いことだか、理窟を覺えても仕様がな、實際自分が人を恵んで見る

と、成程恵むといふことは善い事だナといふことが初めて本當に解る。これが縁因であります、實行に依つて本當にそれが解る。だから人間は生れながらにして佛と同じ性質がある、それが教を學ぶことに依つていよいよ大きくなつて、又教を實行することに依つて本當に凡夫を離れて佛に近いものになります。この三つの事を三因佛性と申します。

この三つの中で「了因」教を學ぶといふことが何より中心です。教を學ばなければ、自分達の凡夫の料簡だけでは、實行しようと思つても、どう實行して宜いか判らないから、そこで了因、教を學ぶといふことを一番大事としなければならぬ。それでこの婦人が子供を産んで可愛がるといふことは、佛の教を學んで、その教を大事に思ふといふことの譬に説かれたのだ。斯ういふのが日蓮上人の説明であります。

それから「舍主驅逐」宿屋の亭主が、今の婦人が子供を産んだのを見て厄介者だとして追拂うたといふのは、何に譬へるかといふと、それはこの尊い教を世の中に弘めて、日蓮のやうに島流しになつたり、いろ／＼な災難を受けるのに譬へたのである。どうも正しい事をやれば世の中の災難を受けるのは仕様がな。ちやうど可愛い子供を産んでそれを育てることが出来ないで、宿屋の亭主

悔しいといふこの決心をするのに譬へたのであります。それからそのお蔭に依つて梵天に生れるといふのはこの世に於てこの教を弘める爲に努力をしたからして、その結果として後には佛の境界にも近づくやうな智慧を具へ、大慈悲心をもつやうになる。斯ういふことであります。

だから今の涅槃經の言葉を日蓮上人が自分の身に引比べて見るとこの通りだ、その通りを自分が通つて来た、いろ／＼な迫害に耐へ、さうしてこの教を弘める爲に力を盡したことは、ちやうどこの貧しい女が自分の子供を慈んだに依つて後の世は梵天に生れたと同じやうに、日蓮自身もこの法華經を弘めることに全力を打込んで来たから、その結果としてこの世は苦しい一生であらうとも、後に於ては必ず佛の境界に到達することが出来ると思ふ。この事を考へれば大きな喜びになる譯であります。

斯ういふやうなことを考へて見ると、昔の經文が決して昔の事ではない、自分の身に一々思ひ合はざるから、そこで有ゆる艱難を経ても自分の信心が途中で緩むやうなことはないといふことを言はれるのであります。斯ういふ読み方が本當のお經の読み方であります。お經の読み方には、

主に追はれたと同じことである。その子供を産んで餘り久しくならぬ内に追拂はれたといふことは、信仰を得てから餘り久しくないことに譬へたのだ。身が十分良くなつてから追拂はれるのなら宜いが、産後の肥立ちが十分でないのに追拂はれたから辛い。それと同じやうに、自分の信心が本當に固まらない時に周圍から迫害が来るといふことになる、その迫害に耐へることは難かしい、その難かしいのを我慢しなければならぬといふことを、お産して間もなく追拂はれたといふことで譬へて居る。これをしつかりと覺悟を定めなければならぬ。

それから途中でいろ／＼悪い風に遭つたり、雨に遭つたといふのは、日蓮に譬へて見れば島流しにされるといふことを幕府から命ぜられたのに譬へられる。それから又途中で蛇や蚊に喰はれたといふのは、これは無智の考のない者が日蓮に迫害を加へて、罵つたり謗つたり、石をおつけたり、杖で打つたり、刀で斬り掛けたりに譬へたのである。一々自分の身に思ひ合せて見ると、お經にある事が皆適切になつて来るといふのであります。法華經を弘めるといふ大きな目的を達する爲に、さういふやうないろ／＼の人間に惡口罵詈雑言される。

それから親子共に水の中に溺れて死んだといふのは、法華經の信心を破らすして、自分の頭を割ねられても後

口讀 心讀 色讀

とありまして、先づ口で讀むのは、これは誰でも讀む、吾々でも口でべら／＼讀むのなら讀める。ところが口で讀んだだけでは本當に讀んだとは言へない。心で信じなければならぬ、即ち心讀、心に讀むといふことが大事である。併し心に思ふだけでまだ本當ではない、自分がその信心を實際の行ひの上にこれを現はさなければならぬ、それが色讀であります。口で讀むのは口讀、心に信するのを心讀と言ひ、身に讀むのを色讀と言ふ。口で讀むだけでは本當に讀んだとは言へない、口で讀むだけなら役者が舞臺でもやります。日蓮上人はいつでも法華經を讀むのは口讀ではならぬぞと仰しやつて居る、法華經を讀むといふのは口で讀むことだけを言つて居らつしやらない、本當は色讀のことを言つて居らつしやる。口で讀むと共に心に信する、心に信すると共に身に行ふ、身に行ふといふ決心を以てただ一聲でも南無妙法蓮華經と言ふ時に、その口で言ふ言葉が心に響き身に現れる。身口意の三業と言つて、身と口と意とが一緒になる。そこで身に行ふのが一番大事です。たゞ口で讀むだけでは何でもない、それは讀まないよりは讀む方が宜いでせう

が……。能くその意味を理解しないで、何でも法華經を讀めば宜い、題目を唱へれば宜い、それも成べく澤山やつた方が宜からうといふので「日に百萬遍もやつたら三年の内に佛に成れるだらう……」なか／＼さう行かない。口に幾ら言つても心に信じなくてはつまらない。心に思つても身に行はなければ自分の力にはならない。

であるからお經を讀むのには、いつでも自分の身に比べて考へなければならぬ。涅槃經の今の譬へでも、自分の身に引比べて考へたら、自分の身にピッタリ當て嵌まる。今の涅槃經の中の貧しい女の通りを自分の身に實現されて居る。その女が自分の子供を可愛いと思つて一緒に死んだといふやうな心持で、法華經を能く讀んで、自分の命のあらん限りこれを身に行ふ。さうしたら必ず佛の境界に生れるだらう。併しこれは容易なことではないが、永い命の中に於ては一切の人を救ふ大きな力が自分に具はるだらう。斯う信じて居られるから、その心に信じて居ることを有りの儘に行はれたのであります。吾々はどうもうつかりすると言葉だけに執はれ易いから、そののを餘程氣を附けなければならぬことであります。

それで日蓮上人はいつでも心讀、色讀を教へられるのであります。その心讀、色讀を御自分が實行してさう

して教へられるのでありますから、それは非常な力になるのであります。お釋迦様が寶積經の中に仰しやつて居るのに、

「言を以て行ひに隨ふ」

といふことがあります。吾々は言つたきりで行はない場合が多いが、言葉で以て行ひに隨はなければならぬ。行ひの方が先に行く、自分が實行して、實行した後で話す。これなら間違ひはない。日蓮上人の御一生は皆それであります。自分でやつた事をお話になる。自分はこれだけ信じてやつたから斯うなつた。これだけ自分が信仰を買いて、迫害に屈せずして大にやつたから斯ういふ結果になつた。いつでも日蓮上人は言を以て行ひに隨はれたのであります。それだから日蓮上人の御一生といふものは大きな力になるのです。吾々の方はその逆であります。言の方が先で、行ひが後です。「何れその内……と言うて到頭やらないうで終ひになる、日蓮上人が何だか自分の事を吹聴して居るやうに思はれるのはそれは誤解でありまして、日蓮上人はいつでもやつた事を後で説明される。それだからそれは非常な力になる。當時の弟子、檀那は日蓮上人が御實行になつたことを眼の前に見て居るから、御自分で實行された事を後から説明されるのを聽いて「成程さうだ、あの通り御實行になつたのだ

成程それではやつて行れば出来るナ」斯ういふ心持が確に起る譯であります。

「不言實行といふことを世間では申しますが、言つて行はないよりは、言はずして行ふ方が宜いに相違ない。併しながら行つた後にそれを言つて人を勵ますならそれが一番宜い。『言を以て行ひに隨ふ』これが一番宜い。自分で實行して、その實行した結果を話すなら、たつた一言でも非常な大きな力になり、一切の人を教へ導くこと

になりませう。日蓮上人が御昔の中で仰しやつて居ることは皆これです。實行して後に言はれるのでありますから、一言一句でも非常な力になる譯であります。

私共はなか／＼日蓮上人のやうな偉大な人と比べられはしませぬけれども、併ながら私共でもそのつもりで御書を読んで、魂を籠めて説かれたお言葉を味はつて参ります時に、やはり非常な力になることであらうと思ふのであります。(第四十四講了)

孟 蘭 盆 供 養 會

祖先並に戦病歿英靈其他有縁無縁各諸精靈水向供養を本部に於て相営みます、
此際御誘合せて御參詣下さい。

日時 七月十二日(日曜)午後二時 法要度修

法定國清 磯部満事氏
信と行 小林一郎氏

財團 統一團

本佛實在の宗教哲學(十三)

河合 陟 明

十一、本有體系の教系と根據(承前)

ヘーゲルの Logic 論理學における Sein 有即 Nichts 無の論はなほ徹底せない。彼は純粹なる Sein=Nichts 有即無として、そこに Worldan 生成を論じ、ないし辯證法を展開せんとするのであるが、然らず。純粹なる有るは即ち有つてあつて、そこに既に有つと有たれるといふ能所の根本對立と合一が、すなはち空假二諦とその中道的統一が、先驗論理として成立ち、それは直ちに自覺的認識の原理として、理本覺をなし、覺自體をなし、先驗的統覺力をなし、すなはち眞如佛性をなし、その無作本有の開覺力をなし、いはゆる智度無極・明度無極としての開覺自性なる般若波羅密をなしてゐるのである。すなはち佛性とは覺性の謂に外ならないのである。けだし有即無とヘーゲルはいふも全く無内容にして何等の意味においても有つところなき、すなはち何等の性質も作用も存在性もなき存在すなはち有とは、無意味でなければならぬ。これに反し予の意味においての純粹無内容なる有つものは、即ち知るものであり、即ち如是體とは如是覺であり、それは一面において無限に有たれるもの即ち自覺の内容即ち實在の内容を要求して働いてゆくも、他面においてはそれは本來無限の時間空間を超え、五百塵點の過去も未來も全く自己の中に攝し盡して、永劫不動・永劫そのもの・永劫の寂靜。Wie Indra 永遠の今そのものであるのである。吾々の存在・吾々の生命・吾々の人格は、いつでもかかる永遠の國に立脚してゐるのである、生死を超えてゐるのである、三世を超えてゐるのである、吾々はいつても永遠そのものの中に息吹きしてゐる、呼吸してゐるのである、太古にして太新、無限に若くして永劫に老いたるものであるのである。その永劫の靜けさ stillende Gegenwart が、すなはち知るといふことであり、

知るといふことの根本形式であり、それが即ちまた有る(在る)すなはち實在といふこと實在といふもの根本形式であり、根本原理である、それが最も深い意味においての「有るもの」であるのである、それを眞如といひ法性といひ佛性といひ法身といひ大我といひ如來藏といひ涅槃といふ。それが自覺と自由と可能の原理をなし、善の原理あるひは超善惡の根本善の原理をなし、その現實的なる内容累積すなはち向覺・行善の極限における佛陀實在ないし本佛實在の quid jure 先驗根據をなすのであり、また Deo 根本實在であり、原始有であり、予は無作本有といふ。しかもそれは實に己心の深い内奥であり、否、己心そのものの直接の形式であり奥底であるのである。

夫山中幽寂、神仙所讚、況涅槃澄淨、賢聖尊崇、絃管結舌、思惟實相、心源一止、法界同寂、樂寂者、知妄從心出、息心則妄皆靜、若欲照知、須知心源、心源不二、則一切諸法、皆同虛空、止即體眞、照而常寂、止即隨緣、寂而常照、止即不止、双遣双照、止即佛師、佛身、佛眼、佛藏、佛住處、是爲第一義、以止安心、如夜見電光、即得見道、破無數億洞然之惡、乃至得成一切種智、即會眞如。

須智慧眼、觀諸法實、一切諸法中、皆以等觀入、般若波羅密、最爲照明、般若是大明咒、觀能破闇、能照道、能除怨、能得實、傾邪山、竭妄海、皆觀之力、知病識藥、化道大行、兼善普會、莫復過觀、於法門中、爲主爲導、乃至成佛、正覺、大覺、遍覺、皆是觀慧異名、當知觀慧、最爲尊妙、但當勤觀、開示悟入、是爲用第一義、以觀安心。

若離三諦、無安心處、若離三止觀、無安心法、若心安於諦、一句即足、如其不安、巧用方便、令心得安

(止五ノ四)

而して、既にいつた如く、知るといふことは有るといふことに何物をも加へないが、しかも知るといふことがなければ有るいふことが顯れない。認識によつて實在を顯すのである。知によつて有が知られる、即ち有が有るのである。有が有として成立ち、有として知られるのである。天台はこれを摩訶止觀といひ、觀鏡圖圓といひ、唯信此心、但是法性といひ、妙樂はこれを修性不二といひ、於修照性、以性了修といひ、見明形像修性本如といふ。しかしもちろん有は根本的に本來其自體として有り、即ち本有であり、既に完全なる意味において一切が本有である以上は、知もまた有より出て來なければならず、出て來るのであるが、智的にはまた知によつて有が始めて成立つのである。

Metaphysik 形而上學は *Wohlfelt* 認識論に先だつと共に、又 *Eckenhuischowitz* 認識論は *Sinclair* 存在論或は *Oben*。本體論に先だつ、兩者は互にその各々の立場に於て根據となり歸結となる。かくして知るといふことは純粹に有つといふこと、包むといふこと、又照すといふこと、即ち純粹に自己自身は無内容にして、從つて純粹形式にして、しかもその内容を有つ、その対象を有つ、包む、照すといふことであるのである。しかのみならずその有つといふことの意味、その概念的內包及び外延を尋ねるに、極めて大、無限に大、無涯際の大なるものであつて、云何爲大、其性廣博、多所合受、大智大斷、大人能乘なるものであり、これ即ち覺了不改、故名虚空佛性、寂照靈知、故名中實理心、しかもそれは因位における名稱であるが、これが果位に至つては、唯示不可思議如虚空、相即圓佛自覺覺他となり、諸佛能見となるに至るものであるから、此に於て予は、この本來有つとしての知の面、ノエシスの面、場所としての面を、「本能有の覺性」と名け、これに對し、本來有たれるもの有たれてゐるものといふ、その内容を尋ねるならば、その内容は亦極めて豊富多量にしてつひに無盡藏なるものであり、寧ろかの有つもの大きさ、この有たれるもの大きさ或は多さに比例する、否それによつて決定されるともいふべき關係にあるのであつて、この有たれてゐる方の内容、いはゆるノエマ的面、於てあるものそれ自身が含備諸法、多所合受、故名如來藏一の面であり、これが因果を通じて諸覺の法藏であり、深固幽遠の藏であり、是法華經藏であり、如來無上の珍寶の寶藏であり、諸佛能見に對する諸佛所得であり、諸佛秘要之藏であり、如來一切秘要之藏であるから、予はこれを「本所有の覺藏」と名け、かくて有つと有たれるとは、一本有體系における本有の覺性と本有の覺藏、或は能有の覺性と所有の覺藏といふ關係をなすのであつて、こゝに無作本有の根本實在は覺自體であるのであり、しかもそれは無作に有つと有たれる、即ち知ると知られる、即ち覺ると覺られるところの覺性と覺藏、能覺と所覺といふ認識論的根原理に於てある、といふことがいへるようになるのである。

これを一言で佛性といふのであるが、その佛性に更に能所を開いて、*Wohlfelt* 認識論的に佛性と佛藏を分つのであり、而して更にこれがまた、本能覺性は多にして空語をなし、本所覺藏は多にして假語をなし、この二面を統ぶる一本有そのもの一如それ自身、即ち眞如、即ち一大佛性、一大法性そのものは、これ即ち勝にして中語をなすといふことができるのであるから、此に於て、本有の體系は覺自體であり、覺自體の體系は、摩訶大多勝の土觀の體系であるとなす統でありであるから、予はこれを先驗的統覺作用と名けるのである。

今、三大部を引いてこれを授證しよう。まづ法華玄義に云く、

大涅槃經云、佛性亦一者、一切衆生、悉一乘故、此是不動不出之一乘、故具三足三法、不縱不橫、夫有心者、皆備此理、而其家大小、都無不知者、是故爲眞、今示衆生、諸覺寶藏、耘除草穢、開顯藏金、一切無碍人、一遣出生死、十方誦求、更無餘乘、唯一佛乘、是故爲妙。經云、佛性亦非一非三非二、數非數法、即慧而理、即理而慧、不執著數、定三定一、不著非數、非三非一、如此乃名無著妙慧。

故知方便諸乘、皆悉不知、無始藏理、一心三法、今如來善巧方便、種々調熟、還示衆生、本有覺藏、使大小咸知、昔覆今顯、名之爲開(玄五下)

つぎに法華文句に云く、

觀心者、空觀爲大、假觀爲多、中觀爲勝、又直就中觀、心性廣博、猶若虚空、故名大、雙遮二邊、入寂滅海、故名勝、雙照二諦、多所合容、一心一切心、故名多也。一心一切心者、心境俱心、各攝一切、一切不出、三千二故也、若非三千、攝則不遍、若非圓心、不攝三千、故三千總別、咸空假中。

又將數入理、數即成境、境觀相對、俱名法門、又境攝假邊、且存其數、空中會無、其數安有、然必約假、以立空中、觀亦如是(文二)

さらに摩訶止觀に云く、

若智信具足、聞一念即是、信故不謗、智故不懼、初後皆是、若無信、高推三乘境、非已智分、若無智、起增上慢、謂已均佛、初後俱非、爲此事故、須知六即、此六即者、始凡終聖、始凡故、除疑怯、終聖故、除慢大。

理即者、一念心即如來藏理、如故即空、藏故即假、理故即中、三智一心中具、不可思議、三諦一諦、非三非一、

一色一香、具一切法、一心亦復如是、是名理即是菩提心、(約如來藏理、釋三諦者、一切衆生、具如來藏、三諦無缺、無始理具、未曾聞名、此理與佛、無毫差也)亦是理即止觀、即寂名止、即照名觀、一實菩提、於名字中、通達解了、知一切法、皆是佛法、是爲名字即菩提、但信法性、但心行菩提、必須心觀明了、理想相應、所行如所言、所言如所行、如眼得日、照了無礙、其途觀途明、途止途寂、如勤射麟的、所有思想籌量、皆是先佛經中所說、初破三無明、見佛性、開寶藏、顯真如、究竟即菩提者、等覺一轉、入三妙覺、智光圓滿、不復可增、名菩提果、大涅槃斷、更無可斷、名因果、等覺不通、唯佛能通、故名究竟菩提、亦名究竟止觀、總以警覺之、譬如貧人、家有寶藏、而無知者、知識示之、即得知也、漸々得近、近已藏開盡取用之(止一ノ五)

さらに止觀における、大段第七、正修止觀の一章において、まさしく今依妙解、以立妙行、こゝにすなはち法性直觀の止觀法門といふ、實踐的認識の一大自覺的發展體系におけるノエマとノエシスとして、十境十乘といふ觀境と觀法を展開し、その十境の第一陰入境に對する十乘の第一觀不思議境の内容として、始めて一念三千といふ玲瓏たる一大天地を開拓し先人未發の實在體系を構成せんとするにあたり、それに先だつて師天台および資章の論ぜるところを湛然さらに輔行傳弘決に註するところのものが、本有實在における覺性と覺藏の關係を示唆してゐるといふことができる。それはすなはち一心・開門・秘藏・示珠の關係であつて、一心といひ秘藏といひ眞實珠といふはノエマの境を指し、開といひ示といふはノエシスの觀を指し、二面を合して予のいはゆる性を佛するものである。まづ天台の功績を章安は論じて云く

非但開拓遮障、內進己道、又精通經論、外啓末開、自匠匠他、兼利是足、人師國寶、非此是誰、而復學佛慈悲、無諸懼恪、說於止觀、施於彼者、即是開門傾藏、捨如意珠、此珠放光、而復雨寶、照闇豐乏、朗夜濟窮、馳三輪而致遠、者兩翅以高飛、玉潤碧鮮、可勝言哉、香城粉骨、雪嶺投身、亦何足以報德快馬見鞭影、而著正路(止五ノ一)

と。而して湛然はついで云く、
若以種種化人、法門單開、不名傾藏、今於一心、開利物門、傾秘藏、示眞實珠、心既不影、藏本

無量、藏既無量、珠亦無邊、含一切法、故名爲藏、理體無缺、譬之以珠、是則開示、衆生本有覺藏、非餘外來、妙體之內、行解因果、一切具足。(同)

この一心・開門・秘藏・示珠の關係は、天台の教理體系たる四教を悉く佛性論上に開顯したる上においての、換言すれば悉くを圓教として接通開顯したる意味においての、一大圓教中における藏・通・別・圓の階程を示すといふことができる。何となれば一心とは佛性を藏するなり、ゆゑに一藏佛性なり、あるひは藏せられたる佛性なり、佛性の藏なり、ゆゑに「佛性藏」なり。これ佛性論中の藏教である。藏は必ず開かざるべからず、佛性藏を開門して、こゝに始めてまづ佛性に通じ、佛性に達し、佛性を透き、佛性を洞かにせんとするのであつて、佛性とは性を佛するなり、ノエマをノエシスするなりといふ、その性を佛する働きがこゝに始めて現れてくるのである。これ「通佛性」としての佛性論的階程である。佛性は秘密藏であり、秘藏物である、ゆゑにそれを具さに分別し、了別し、すなはち「別佛性」して、恒沙無量の法門に達せねばならぬ、これ佛性論的別教であり、かくてつひに佛性といふ眞實珠・如意珠・圓滿珠を自己自身に示し、また他に示して、佛性眞如法界に住するに至る、これ由來圓滿珠の如き佛性の性に稱うて、性を圓し性を佛するの極致に達し、佛性の因位より佛陀の果位に登れるもの、すなはち「圓佛性」としての圓教を完結したものである。佛性とは性を佛するといふ働きをなすものであるが、その佛するといふ能覺作用・自覺作用・向覺作用・統覺作用が性を藏し、性を通じ、性を別し、性を圓する、といふ四教的發展をなしてゆくのである。かくして無作の本有を有作の今有とし、自有とし、始有とし、理の本覺を事の自覺とし、始覺とし、その極致において始覺を本覺に合體せしめ、今有を本有に還元せしめてゆくのである。

しかるにその始覺の本覺的還元・今有の本有的合體といふ、その本覺といひ本有といふものに、實は眞如佛性としての理本覺といひ無作の本有といふもののみならず、今一つ大なる極果本佛としての事本覺といひ無始の本有といふべきものが含まれてゐるといふことを看破せなければならぬのである。今有といひ始覺といふは、この理事二面における本としての「有」。極を結び、極を媒介して一たらしむるところの、否、自己においてこの二を一とするとところの「有」。極線となるのである。あるひは逆に、むしろ有始といふ一點を通じて自己の開覺そのものが、無作と無始といふ二面の無窮邊を走る極線の極となるのである。

こゝにおいて今、予は、天台より妙樂、妙樂より傳教、傳教よりさらに日蓮聖人に至り、かゝる歴史的發展の序を遂うて、しだい／＼にその教學構成の上に *dogma* 近迫してきたるところの、本有といふ思想を拉しきたつて、以て傳教における眞の實在概念とし、それによつて先にもいふが如く、實在の基底面より絶頂に至る諸層を統一的に構成せんとするのである。すなはち天台・妙樂等においては、この概念は純粹に先驗的無作の理門としての法性實相あるひは佛性の本有を指すにとゞまつてゐたのであるが、予は日蓮聖人の十法界鈔における堂々たる實在認識論に根據し、かつ大涅槃經における本有今無傷を立證として、これを本佛本有といふ修顯極果の上における、かつその無始なるがゆゑに本有なりといふ意味におけるところまで發展せしめ、しかのみならず、かの華嚴家の性起説よりも一層根本的なる——趙宋天台の四明も指摘するが如き——實相論系の正統たる天台の性具説、すなはち本具の思想をも、この本有の中に包括して、本有とは「本來有る」といふのみならず、「本來有つ」といふことなりとし、さらに本來有つは「本來知る」なりとして、本來的なる覺の原理すなはち無作の認識原理いはゆる *quid iuris* を確立し、據つて以てこゝにかの起信論および華嚴系統より始まつて、とくに日本中古の天台教學を經、さらに現代の島地大等氏に至るまで發展してきたる——但しその原始的意味は大いに變化して傍系的と墮してゐるが——そのいはゆる本覺思想をもこの本有概念中に攝取し、しかもそれは未だ畢竟するに眞如法性の理本覺たるにとゞまるか、然らずんば理事雜亂の本覺思想たるを脱せないものであるが、これに對し予は日蓮聖人の十法界鈔における「無始無終の本佛」の「本覺本有の十界五具」なる一語において、眞に本覺思想が完成して正しき本佛の事本覺が顯説せられゐることを看取し、予はとくにこれを本佛の統覺または統覺の本覺と名けるのであつて、その詳細はこれより論明せんとするところなのであるが、しかもかゝる統覺の本覺の本佛をも實に我が一念の己心に本有するものなりといふ意味において、すなはち日蓮聖人の「觀心本覺」の意味において、本佛本有とは、本佛が法界の無始根本より實在する——本來有る——といふのみならず、さらに一步を極めて、實に本佛をも我が本有する——本來有つ——無始以來有つ、無作に有つ、そも／＼本佛本有の場所はいづこそ、それは實に我が己心なり、我が一念なり、我が法界的大己心なり、といふ意味とならざるを得ないのであるから、こゝにおいて本有とは、(一)初め天台の眞如佛性の本有といふ基礎的なる宗教的主體論より、(二)極まつてつひに日蓮教學における信仰對象の建設面としての、本佛本有といふ宗教的客體論の完成と、

(三)さらにその客體をも再び主體に本有するといふ主體論における最後の完成、否むしろすなはち主觀客觀を一括して實在論そのものの最後の完成、また即實踐論そのものの始終一貫性の包括といふこととの、この三段の發展をなすものであることを、まづ大綱として説くのである。否、今一步、救済方法論としてこの總てを妙法の題目に含蓄する！

かくしてこゝに天台等の實相論系における性具思想も、いはゆるカント的には *reine Vernunft* 純粹理性的思想も、また華嚴等の緣起論系における本覺思想も、すなはち *Praktische Vernunft* 實踐理性的思想も、一層發展しかつ完結したる相において、一大本有體系中に包括せられるのであつて、これまた法華の獨特なる批判的圓融思想としての、開顯統一の一部面に外ならない、いはゆる圓教の圓教たる所以、またその理圓も事圓をも一括しての圓教たる所以が、こゝに成立つのである。而して本有體系の完結は、同時にまた、天台より特に著しく巧用せられて、爾後の佛敎史上に蘭菊と咲き亂れたる、無作思想そのものの完結を齎せるものでもあるのである。(つゞく)

南無妙法蓮華經

昭和十七年林鐘十二日、二十二年前、予が信仰の苦節につぶさに辛酸を嘗めたるの日、日蓮大士開教の靈蹟にありて感慨極りなし。

祖先追孝の眞義

本 聖 院

釋尊のみ教は、徹底せる道徳教である。信仰と道徳とを分離せしめたのは、後代の謬見であることは、釋尊の御日常を拜しても明かであり、又最後の御遺教にも照々として疑ひないことである。

七月は吾等祖先追孝の爲に、有名な孟蘭盆供が營まれる、洵に有難い年中行事の一つである。我國では遠く第三十七代齊明天皇様の時、須彌山の山形を作り、飛鳥寺に於て孟蘭盆會を設けられたのに始まり、聖武天皇様の天平五年七月より宮中の佛事として行はれて來たものであつた。

佛法渡來の始めは、専ら加持祈禱の修法や、罪障消滅の懺法の方面が尊重されてゐたが、やがて進んで國民教化の上に、過去・現在・未來を通した三世一貫の報恩教として、そこに度世の要道が高調せられ、遂に日蓮聖人に來つて空利絶後の日本佛敎たるの眞價が光顯されるに至つたのであつた。故にこの祖先追孝の尊い佛事供養も本門三寶の救護を披らすしては、教義の上から完遂されないことを正確に信解すべきである。

聖訓に言はく、孟蘭盆と申候事は、佛の御弟子の中に目連尊者と申して、舍利弗にならびて智慧第一、神通第一の人をはせり。其の母の慳貪の科に依て餓鬼道に墮ちて候しを救ひ給ふより事起りて候……目連尊者は法華經と申す經にて正直捨方便とて、小乗の教を立どころに捨捨て、南無妙法蓮華經と申せしかば、やがて佛になりて名號をば、多摩羅跋栴檀香佛と申す。此時こそ父母も佛になり給へり。故に法華經に云く、「我が願既に満ちて、衆の望も亦足りぬ」云云。

記 事

本 部 團 報

維持會 本團役員の任期が去六月下旬で満了に付、同時に本部に於て維持會を開催して御賓前に嚴修後、選挙の結果左の通り就任を見た。

- 理事長 上田辰卯
- 常任理事 磯部滿事
- 會計理事 榮田武治
- 理事 山田英二
- 理事 和賀義見
- 理事 中村榮二
- 理事 池田新一
- 監事 野口英司

人心教化の要、今より急なるはない時に際り、顧みて本團の中心事業の第一は佛祖正脈の法統を護持する事であり、第二我國精神文化の精髓を體系的に發揮する事である。多くの教家が當面の教化練成に熱中してゐる際、吾等は靜かに國家百年の大策の下に永遠の教化を高調して、國民精神の根柢を培養し、知法恩國の大義を宣揚して、以て世界人類の歸結する處を與ふべきである。所謂小事は急がずば爲らず、大事は緩

ならずは逐げざる自然の法爾である。宗祖大聖人が一天四海普賢妙法を理想されたことは、即ち此の現實の地上に寂光淨土建設の意に外ならない。

今や皇軍千辛萬苦、運河荒に属ひ、時草味に蝕れる遼瀋之地、猶未だ王澤に霑はずして、各自自強を分ちて用て相凌辱せるを平定し、各、餘妖尙梗しと雖も、南太平洋の風塵、皇威を頼りて將に原民其緒に安んぜんとする極めて微妙の機、廣宣流布の絶好此を外しては遂に得難からん歟、何ぞ同人の勇奮色願なからんやである。任重くして路遠しの歎を發してはならない。誠心一到何事か成らざらん故である、身の不故を顧みる勿れ、其の至誠の足らざるを憂へよである、身の非才を憂ふる勿れ、其の熱意の及ばざるを愧ぢよである。道の爲、國の爲、神の爲、隨せんは佛徒に非らず。教家は常非常俱に第一線に健闘すべき者である。新選の幹部は宜しく自重興起さるべきを念願する。

勝鬘經講座 毎週土曜日午後一時半より二時迄勸行、二時より三時迄まで、小林先生が懇切に本經を講讀される。有名な一乘章が當に高調に達せんとして、いかにも夫人の篤信體格に恭敬の念押へ難く、隨喜の至りに堪えない、一人でも多くこの勝縁に結ばしてあげたい。

はちす婦人會、第一と第三の土曜日例會には、待ち兼ねたやうに薄い雲があつて、佛法悦に浴する。先頃は神戸から珍客が來られて、御體験を聴かされ時の過ぐるも忘れる位であつた。

又先月二日には會員米倉姉の御令妹が急逝されたので、初七日の八日に池田、堀江矢崎、岡本、塚本等の諸姉は磯部先生と共に下北澤のお宅に弔問、心から御回向の法味を捧げた。

信行會 毎月曜日の早朝六時から本部に於ての勤修と法話は、産報會員其他團員有志に依つて講堂熱誠に練成が續けられてゐる。今回一佛垂發聖略説教誡經のお話が始められた、日蓮門下の俗信雜業共に未法無戒を痛に、放逸なだらしない生活に墮落してゐる時、先づ心あるお互から態度を一變してかゝることが、何よりも大きな教化であるまいか。僧侶は僧侶らしく、信者は信者らしくありたいものである。徒らに立正安國だ、皆歸妙法だと大言壯語しても脚下を顧みることなく、俗の俗、奥の奥たるもので、夫れこそ佛祖三寶のお顔に泥を塗るもので、大に折伏すべきである。折伏は他人にする前に自己を切に折伏すべき要あるまいか、敢て門下の反省を嚮む。

和賀謙介氏を悼む

本國維持團員であり、本佛教會の最高幹部であつただけに極めて護法淨信の居士であつた。昨冬來風邪から急性肺炎と變じ、御醫藥の結果大に快方に向はれ、三月頃には外出さへする程度であつたが、其後胃腸の故障から遂にこれが致命症となつて去る五月廿七日、護持正法の大事を遺囑され、堯舜として豐山住詣されて了つた。惜みても惜しみ切れない、行年五十四歳。法號 本寺院恩國護法日謙居士 茲に度みて哀悼の意を表し奉る。南無妙法蓮華經

福島 教信

五月二十五日 當日は高商如春莊に先生をお迎へ申上ぐる筈であつたが、突然の事故にて高商の例會は同日夕刻支部例會と合同することになつた。一同修法の後、先生より壽量品自我偈の御講義を戴いた。夫れ國家興隆は一億國民の和に依る。和は正しき宗教によつてはじめて出来ることである。正しき宗教とは眞正の本尊を仰ぐことである。壽量本佛を説き明せる自我偈讃仰の一日も忽にすべからざる所以はこゝにある。六月十日夕 大町中村様方にて支部例會

磯部先生より自我偈の續講を頂く。六月十一日 如春莊にて高商例會。先生より「大東亞建國の眞義」に就て諸方面から論ぜられ、遂に日蓮主義に歸結を與へられた。終つて座談會も活潑であつた。此の日中村おば様より櫻桃を頂戴し、一同賞味しつゝ生死の大事を語り合ふも、若人の眞面目謹如たるものがあり、眞に有難いことであつた。

酒悦立正産業報國會記

五月二十二日 金曜日、仲町御實前に於て磯部先生御導師の下に嚴修、後、佛本行集經に就て有難い御法話があつた。五月二十五日 月曜日、統一團で朝六時から磯部先生御導師で嚴修、後、優婆塞戒經中般若波羅密に就いての御講義有り、般若即ち智慧に就いて有難い御法話を伺ふ。般若といふのは、普通にいふ知識や智恵とは違ふ。般若とは、一言すれば佛の智慧の事であつた。然らば般若とは何んなものかといへば、善惡の相を知る。世間出世間の教諭を知る。因を知り果を知る。初方便を知る。根本を知る。能く世論世事を讀んで邪正の道を分別する。是を智慧といふのである。

般若とは大體以上のものであるが、優婆塞戒經も悉々本日で終講である。随分長い御講義であられたが、先生の御講義によつて、日常生活の心構へも幾分でも出来たこととを心から感謝申上度い。なほ先生は戒經の締めくくりとして、六波羅蜜を修學するものは、六方を供養し、財命を増長することが出来る。蓋し出家の菩薩は淨智慧を修するを難しとしないが、在家では中々六ヶ敷い。在家の者は惡因縁があるから餘程しつかりしなければ不可なりと結ばれた。

五月二十八日(木曜日) 本佛教會布教第二十週年の紀念法要があるので、會長、副會長それに小生が代表で出席する筈であつたが、朝日副會長が餘儀ない事情で出席出来ないで、朝日副會長の替りとして岡本君に行つて貰ふ。勢頭和賀先生がお起ちになられて、二十年の布教の御苦心話があつた。その間の先生の御苦心は並大抵ではなかつた。聞いてるで全く涙の出る思ひがした。女の方は殆んど全部の方が泣いて居られたやうであつた。

道を廣めやうとすれば、誰でもこのやうな較の道を進まねばならないのであらう。先生と御一緒に獲ますやうつて來られた同僚の方々の御話もそれぞれ血の滲み出るやうな御話であつた。先生の御話の後、功勞者への賞状の授與

當日は、四時法と八正道のお話を伺つたが、今後毎月曜日の先生の御講義が待望しい。六月二日 火曜日午後六時三十分より駒込稲江邸に於て同心會、磯部先生御導師の下に四十分お勤めをして、天台大師の「小止觀」の御講義があつた。

六月八日 月曜日は第六回大詔奉戴日、當日は統一團で朝六時より式を行ふ。最初磯部先生御導師としてお勤めをする。お勤めの後國民儀禮をなし、先生によつて朝々と大詔の御奉讀があつた。六月の六日大詔奉戴日は、月曜日の修養會と一括になつたので、遺教經の御講義を休まされ、「教育と宗教」といふ題の下に四十分間有益なるお話を伺つた。

六月八日 午後一時より上野警察講堂に於て、産業報國會上野支部の役員、會長協議會があるので出席。最初に國民儀禮あり、式後名譽會長の御挨拶、戰時産業安全週間に於ける防火指導に就いて、下谷消防署の方の懇切なる御話別に市會選挙に對する御注意等有り。二百三十億貯蓄運動に對するは態々下谷郵便局長が出席長時間の御話があつた。その他約十項計りの報國指示事項があり、協議事項としては、本年度安全週間舉行に關し色々協議をなし、午後四時三十分散會した。

六月十四日、日曜日は午後七時三十分より駒込に於て同心會。最初和賀先生御導師として、池田會長御實前に於て嚴修をした。お勤めの後、磯部先生の小止觀の御講義有り、具後第一中の持戒清淨の御講義を伺ふ。その中懺悔の法十項は常に我々が守らねばならぬものであるから、項目だけ書き記して置たい。一、明かに因果を信ず。二、重怖畏を生ず。三、深く懺悔する。四、滅罪の法を求む。五、先罪を發露す。六、惡の相續心を打ち切る。七、護法心を起す。八、大誓願を起す。九、十方の諸佛を念ず。十、罪性の無生を觀ず。磯部先生の御法話の後、和賀先生の開目鈔の御講義有り、本日は佛敎と儒敎との關係、外道と佛敎との關係に就いて、長時間詳細なる御講義を伺つた。

殊に我々が驚歎したことは、印度敎を詳細に御説明下さつた事、分ても六種の外道に、就いての御説明が、微に入り、細に入りつてなされた事に對しては舌を巻いて驚くより外なかつた。理路整然たる先生の御講義に對し、我々は常に敬慕讃仰して止まないものである。

六月十五日 月曜日は朝六時より統一團御實前に於て、磯部先生を御導師として嚴修有り、後、遺教經第二講、邪業對治要法の

式があり、お供物や記念品等頂戴して休憩その間に辨當を戴く。休憩後、磯部先生の列々たる御法話あり海軍の精神教育に就いて佐藤海軍中將閣下のお話があり、その後井上清純男爵の有難い御のすくやうな御話、三上人の御法話があつて、盛大な二十週年紀念法要を散會したが、この日、和賀先生には杖も柱も思ひ、お慕ひ申して居られた御令兄の逝去に遇はれたことは、會が盛大であつただけに一入感傷無量であつた。皆遅くなつて家へ歸つた。

六月一日 月曜日は統一團で朝六時から磯部先生御導師の下にお勤めをなす。優婆塞戒經も先週で目出度終講したので、今日から「遺教經」の御講義である。先生にはわざわざ豫め原稿を下されたので、それをプリントしてテキストにする。まことに至れり盡せり、何時もながら有難さが身に沁みた。

遺教經といふのは、佛最後の御説法で、佛が沙羅双樹の間に於て、將に涅槃に入り給はんとする中夜に於て諸の弟子の爲めに説かれたお經で極めて有難いお經である。我々は一日に佛五十年の説法といふが、それは単に永い年月に互つて業生を説法されたといふだけのものではない。今正に涅槃に入るその時まで業生を度し給ひし、その大慈念に十分に感じるものがなければならぬ。

御法話を伺ふ。我々は日常十分に戒を身ばねばならぬ。即ち波羅提木叉を尊重せよ。波羅提とは、戒法解説、木叉とは別々といふ意味で、多数ある戒の中で一戒でも持て

ば、その功徳で一戒別々に解説が得られるといふお話があつた。
六月十九日 金曜日午後一時から日本青年館で、二百三十億貯蓄並金屬回収の講演

會があるので、岡田理事が代表して出席した。(三郎記)

團費誌料維持費及寄附金領收

(自五月二十一日 至六月二十日)

金貳圓五拾錢也	山形縣	村川源次郎	郎	
金貳圓貳拾錢也	名古屋	山田健治郎	郎	
金貳圓貳拾錢也	大阪	眞田文雄	郎	
金五圓也	東京	笠原英二	郎	
金壹圓五十錢也	東京	山田原滋	郎	
金壹圓貳拾錢也	東京	小堀子藏	郎	
金拾圓也	埼玉縣	繁田善治	郎	
金參圓也	東京	小島政幸	郎	
金五圓也	東京	岩上富久	郎	
金貳圓貳拾錢也	東京	福島縣	山田珂子	郎
金貳圓貳拾錢也	宮城縣	八木左一	郎	
金壹圓貳拾錢也	福生	大澤保久	郎	
金拾六圓六拾錢也	東京	鈴木久保	郎	
金貳圓五拾錢也	名古屋	牛田建久	郎	
金貳圓貳拾錢也	東京	法道會圖書部	郎	
金拾圓也	神戶	野村一	郎	
金拾圓也	東京	中支	深澤文	郎
金貳圓五拾錢也	東京	東京	深澤文	郎

金貳圓貳拾錢也	靜岡縣	桑原宇	有
金拾圓也	東京	林浦	郎
金五圓也	東京	伊藤重	郎
金參圓也	東京	大原	郎
金貳圓貳拾錢也	東京	井上	郎
金六圓六拾錢也	東京	張ヶ谷	郎
金貳圓五拾錢也	東京	内倉	郎
金貳圓貳拾錢也	東京	中川	郎
金壹圓貳拾錢也	東京	大久保	郎
金壹圓貳拾錢也	東京	井上	郎
金貳圓貳拾錢也	東京	木下	郎
金五圓也	東京	久保	郎
金五圓也	東京	井上	郎
金參拾圓也	東京	大久保	郎
金拾圓也	東京	大久保	郎
金六圓也	東京	大久保	郎

右雜有入帳仕候也(以是領收證代用)

財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改 版	特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	賜天覽	同	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	同	金五圓

磯部滿事謹輯	特價	金壹圓七拾錢
本多日生上人	同	同
動行作法	同	同
佛教の心髓	同	同

河合彰明著	定價	金壹圓
皇道と日蓮主義	送料共	同

東京市小石川區普羽町六ノ十七
財團法人統一出版部
振替東京九四二〇番

一冊	金貳拾錢	送料壹錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

昭和十七年六月二十七日印刷納本
昭和十七年七月一日發行
(第五百六十八號)

發行所 財團統一團
東京市小石川區普羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

印刷所 野島好文堂印刷所
東京市小石川區普羽町八ノ十一
電話牛込六九六六番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

目 次

信心の心得(下)……………	本多日生
開目鈔講話(第四十五講)……………	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十四)……………	河合陟明
大東亞建設……………	本聖院
記事	
○本部闡報	
○福島教信	
○産報會記	
○入帳報告	

第 四 十 七 年 八 月 號



統

法財人

統

一團

發行